HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オンライン交流を活用したブレンディッド・e ラーニングによる高校中国語教育モデルの実践
Author(s)	杉江, 聡子
Issue Date	2012-08-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55797
Type	proceedings (author version)
Note	第37回教育システム情報学会全国大会. 2012年8月22日-24日. 千葉工業大学芝園キャンパス.
File Information	JSiSE2012ID_BL_CFL_sugie0607.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

オンライン交流を活用したブレンディッド・e ラーニングによる高校中国語教育モデルの実践

Practice of the Communicative Blended e-Learning for Chinese Class at High School in Japan

杉江　聡子[*1]
Satoko SUGIE[*1]
[*1] 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
[*1] Graduate School of International Media, Communication and Tourism Studies, Hokkaido University
Email: sugie@imc.hokudai.ac.jp

あらまし：高校の第二外国語としての中国語学習者を対象とした，学習意欲のデザイン理論に基づき，語彙・文法学習中心の一斉授業，ICT 活用技能訓練のための Web-Based Training（WBT），日本と中国の学生オンライン交流を統合した，新たなブレンディッド・e ラーニングモデルを構築する初歩的段階として，モデルの基本概念，e ラーニングサイトのコンテンツ開発，授業実践，及び日本と中国の学習者による評価の質的な分析結果を報告する．

キーワード：ブレンディッド・ラーニング，オンライン交流，中国語学習，外国語教育，質的研究

1.　はじめに

中国の急速な経済発展に伴う中国語人材ニーズの高まりを背景に，中国語教育・学習は初中等教育へも拡大している．教育情報化，グローバル化時代に対応する「新しい能力を伸ばす，つながる学び」（久保田，2012）(1)が必要だが，これは従来の行動主義的な教育・学習観に基づく授業ではカバーできない。学習者の好奇心と中国語コミュニケーションへの期待を原動力に，学習者が自身の文脈で主体的に中国語を用い，つながり合い，学び合う体験に基づき，学習意欲の喚起・維持・向上を継続的に促進する教育的アプローチが必要である．

90 年代以降，第二外国語としての中国語の情報化が試みられているが，高等教育機関での，教材の電子化，学習コンテンツ開発，学習管理システム（LMS），音声識別システム利用の発音矯正，Flash 動画・ポリゴン利用のゲーム型教材開発等が主で，閉鎖された教室環境や疑似的なコミュニケーション場面での実践に限られる（杉江，2011）(2)．交流型のものは，ビデオ会議システム利用の遠隔授業配信や異文化コミュニケーションに関する研究（砂岡ほか, 2004-2010）(3)が代表的で，自信の獲得，社会への応用力の実感，中国語レベル試験における高得点者の増加等の成果が報告されている．しかし，いずれも学習者個人の能力変化の量的分析に注目していること，中国語教育の高大連携がないことから，高校中国語で交流を主とするブレンディッド・ラーニング（BL）に関する質的な研究はまだ少ない．

2.　オンライン交流を活用した BL モデル

本研究では，ID プロセスのうち学習意欲のデザインに関する ARCS-V モデル（Keller，鈴木, 2010）(4)の重点を参考に，高校中国語の学習者を対象とし，①対面式の語彙・文法学習，②ICT 活用技能訓練中心の WBT, ③日本と中国の学生間オンライン交流を統合した，「交流型ブレンディッド・e ラーニングモデル(5)」（図 1）の構築を目指している．

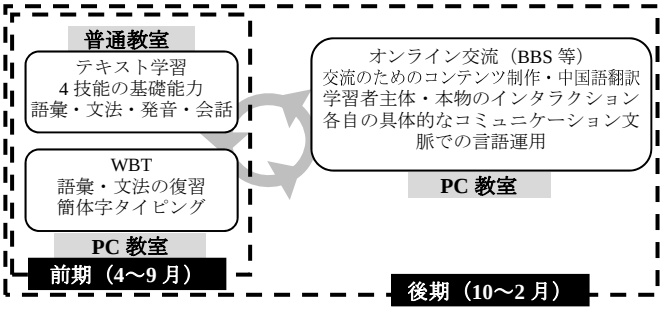

図 1　オンライン交流を利用した
ブレンディッド・e ラーニングモデル

3.　交流プラットフォームとコンテンツ

WBT 及びオンライン交流のプラットフォームとして，日本に住む中国語学習者の高校生と，中国に住む中国人の日本語学習者の直接交流の場である e ラーニングサイト「中日学生交流網」を構築した（http://mithrandir.iic.hokudai.ac.jp/sugie/magic3/）．日中の教育機関は Windows OS が主流であるため，北海道大学情報基盤センターの UNIX サーバにオープンソースの Contents Management System「Magic3」を用いて構築した．日本側は高校と自宅から，中国側は学生寮から，WWW ブラウザを介しサイトにアクセスして学習・交流活動を行う．コンテンツは，日本人学習者専用の自習用コンテンツ，日中学生どうしの交流用コンテンツ，授業評価・情報収集用の補助コンテンツから構成される（表 1）．

表 1　「中日学生交流網」コンテンツ

自習用コンテンツ	中国語 IME 設定方法説明 ピンインによるタイピング方法説明・基礎練習 ピンインによるタイピング練習問題（対面式授業のテキストに基づき独自開発の電子教材）
交流用コンテンツ	中日交流 BBS（日本語・中国語同時併記のルール） 日本の学校・授業紹介（テキスト・写真・動画） 中国の学校・授業紹介（同上） 日本の高校の学外行事・イベント紹介（同上）
情報交換用の補助コンテンツ	授業評価アンケート（独自開発の Moodle サイトへリンク） リンク集（交流相手校ホームページ，オンライン辞書，自動翻訳，文法解説，中国語関連試験及びスピーチ大会等サイトへのリンク）

4.　授業実践

2011 年 4 月～12 月, 札幌の高校生と中国吉林省及び湖北省の大学間で本モデルを実践した．日本側は主に授業時間を利用して高校のコンピュータ教室から，中国側は放課後等の授業時間外に学生寮から，サイトにアクセスした．日本の高校は他教科との調整によりコンピュータ教室の利用機会が少ないこと、セキュリティ対策のアクセス制限があること、高速ブロードバンド環境ではないこと等から，作業時間の確保や動画の自由な活用は困難であったが，中国側は個人所有のパソコン利用のため比較的自由かつ回線速度も快適な環境であった．

表 2　参加者の構成

地域	専攻・学科	学年，人数	中国語・日本語学習歴
日本 札幌	国際文化科	高 3（女 10,男 3）	初級班, 1 年半（中国語選択）
	国際文化科 情報流通システム科	高 2（女 22,男 6） 高 3（女 9,男 3）	入門班，半年（中国語選択） *週 2 回，1 回 50 分（全班共通）
中国 長春	日本語科	大 2，3（38 名） *BBS 参加 9 名	中級班, 2･3 年（日本語専攻）
中国 宜昌	日本語科	大 2（37 名） *BBS 参加 14 名	中級班, 2 年（日本語専攻）

図 1 に示す通り，日本側の入門班は，前期に語彙・文法学習及びその復習のピンインタイピング（「読む」「書く」技能）練習と動画教材を用いた「聞く」「話す」技能の練習を行い，後期には並行して，自己紹介と趣味をテーマに BBS 交流を行った．初級班は，学校紹介，日本文化，日本の若者の流行をテーマに年間 3 回のグループ学習を行い，学生が交流題材としてテキスト・写真・ビデオ等を用いた作品を自主企画・作成し，サイトに掲載して，それらをもとに感想や意見交換の BBS 交流を行った．

図 2　初級班の作品と中国の学校・授業紹介

5.　データ収集と分析

日本側は 2012 年 1～2 月, 中国側は 2012 年 3 月（現地訪問調査）, 授業評価オンラインアンケートと半構造化インタビューを行った．オンラインアンケートは日本語版と中国語版を Moodle で構築した。

学生の協調学習及び交流体験に基づく具体的な評価を知るために，記述式回答とインタビュー回答に対して，Grounded Theory(6)に基づく open coding とカテゴリ化の質的データ分析を行った．

日本側は,「本モデルが外国語コミュニケーション能力の向上に有効か」の問いに対し 95%以上が「非常に有効（入門 28 名，初級 9 名）」「有効（入門 9 名，初級 4 名）」と回答した．初級班の理由は，①感情面での充足感や満足感，②技能面での向上や習得の実感，の 2 方向にカテゴリ化された．

中国側（BBS 交流参加者）は,「非常に有効（4 名）」「まあまあ有効（10 名）」「どちらとも言えない（4 名）」であった．理由は，①感情面での充足感や満足感，②日本語運用能力の向上，③日本の若者との交流という貴重な経験，④学習プロセスでの自己反省や発見の 4 方向にカテゴリ化された．日中共通の肯定的評価として,「直接母語話者と交流できることの価値・意味」があったが，中国側の方が交流を学習方略の 1 つとみなす傾向が強く，交流を通じて日本人らしい言語表現や流暢さを習得したいという期待が強かった．

6.　今後の展望と課題

学習者による評価の質的分析により，オンライン交流を利用したブレンディッド・e ラーニングモデルが，グローバル化時代の高校中国語教育・学習に有効であることが初歩的に実証された．交流したいから学びたい，もっと中国語がうまくなりたいという情熱，本物の中国人の若者と直接交流しているリアリティと喜び，中国人をもっとよく知り友達になりたいという親近感は，外国語学習の意義・価値を深める強い動機付けとなる．

今後は，中国側から出された QQ（中国で普及している P2P 技術利用のインターネット電話）での同期的な交流の強い要望に対し，高校のネットワーク環境やインストール権限の制限下でいかに対応可能かといった実践上の課題解決が急務である．また，量的研究，複数研究者，多面的データを取り入れたトライアンギュレーションにより，より信憑性の高い現象の記述と多角的な効果の解釈について，研究品質評価の指標を導入・開発する必要がある．

参考文献

(1) 久保田賢一，“「ためこむ学び」から「つながる学び」へ”，国際文化フォーラム通信 93 号「ICT で変える学び」, pp.2-3 (2012)
(2) 杉江聡子“NBLT（ネットワーク活用の言語教育）のための中国語学習支援サイトの構築―日本と中国の高校生間の交流型学習者コミュニティー形成”，北海道大学大学院国際広報メディア･観光学院修士課程, 平成 22 年度修士論文（2010）
(3) 砂岡和子，“グローバル化時代の外国語教育-ICT 活用の早稲田大学外国語教育実践-”，私立大学連盟『大学時報』, pp.20-29 (2009)
(4) ジョン・ケラー（著），鈴木克明（訳）“学習意欲をデザインする：ＡＲＣＳモデルによるインストラクショナルデザイン”， 北大路書房，東京（2010）
(5) Heinze .A. “Blended Learning; An Interpretative Action Research Study,” 2008 (Doctoral dissertation) [retrieved: http://usir.salford.ac.uk/1653/1/Heinze_2008_blended_e-learning.pdf, April, 2012]
(6) Strauss, A. & Corbin, J. “Basics of Qualitative Research Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory (2nd edition)”, Sage Publications: London (1998)